

西山休靜の淨土思想と諸經、諸師の關係について

李 正 模

西山休靜（一五〇二—一六〇四）は儒教を崇める崇儒抑仏の朝鮮時代に再び仏教の黄金時代を築き上げた人師である。彼の重要な著書として『禪家龜鑑』、『禪教訣』、『心法要抄』、『雲水壇』、『説禪儀』、『清虛堂大師集』、『碧松行略』等が上げられるが、この著書についての内容は禪思想について説かれたものばかりである。けれども、彼は韓国伝統の禪思想を繼承しつつ、且つ、淨土思想についても触れられていることが西山禪師の特徴といえる。これらのことをふまえた上で本論においては、淨土思想を三分別して考察していくことにする。

一 觀念念仏法

西山が最も力説していることは觀念念仏である。そのことについて示せば、『心法要抄』に、

念仏者 在レ口曰誦 在レ心曰念 徒誦失念 於レ道無レ益 阿弥陀仏六字 定出レ輪廻ニ之捷徑也 心則縁ニ仏境界ニ 憶持不レ忘

印度學佛教學研究第三十七卷第一號 昭和六十三年十二月

口則稱ニ仏名号ニ 分明不レ乱 如レ是心口相應 名曰ニ念仏一とあり、この中に示されている内容は三つに分別して考えることができる。一つには「念仏者」から「於レ道無レ益」の文であり、これは高麗時代に書かれた、『求生行門要出』の、
念者憶也 憶ニ持戒行ニ 不レ忘精勤 仏者覺也 覺ニ察身心ニ 不レ令起惡 又在。口曰誦 在レ心曰念 徒誦失念 於レ道無レ益
○印の文を引用したものとと思われる。この思想の根源は菩提達磨の『小室六門』の「在レ口曰誦 在レ心曰念 故知念從レ心起 名為ニ覺行之門ニ」の文に見出すことができる。これらのことから、西山の觀念念仏は『小室六門』と『求生行門要出』の思想を繼承したといえよう。二つには「心則縁ニ仏境界ニ 憶持不レ忘」の思想である。これは『觀經』の第八像觀で説かれている一仏二菩薩及び淨土莊嚴を「憶持不レ捨」すること、又、第十二普觀の五百光明、仏菩薩及び淨土莊嚴を「憶持不レ失」する所の教えを受け入れたものと思われる。三つには「徒誦失念 於レ道無レ益」の考え方である。

西山休静の浄土思想と諸経、諸師の關係について（李）

この考え方と諸師の見解とそれぞれ相違する点を見出すことができる。即ち、永明延寿は『萬善同歸集』に、

明散心念仏 小音讚歎 指甲画像 聚沙成塔 漸積功德
皆成仏道（大正四八卷九七六上）

と述べられ、また、法然上人の「和語燈録」卷第十二「念仏往生要義抄」には、善悪・聖人在家・澄心妄心・一声十声・臨終平生・智者愚者等の各の念仏に差別なく平等の功德が説かれている。即ち永明延寿は散心念仏、小音讚歎などの功德を積むことによって皆成仏することを強調し、法然上人は澄心妄心、智者愚者の念仏の功德は平等であることを強調している。従って西山休静の「徒誦失念 於道無益」の考え方は懸隔な差異があるといえよう。このような考え方は『小室六門』には示されていないので、高麗時代より朝鮮時代までの独特な念仏思想だと思われる。次に観念について『心法要抄』に、

合掌向西方 擬心念弥陀 平生夢想事 常在白蓮華 念
仏纒開口 金池已種蓮 信心如不退 決定礼金仙 擬心
日没謝娑婆 十六觀經聽釈迦 無限色声清耳目 許多天
地一弥陀 西方念仏法 決定超生死

と述べられ、『観経』の日想観など色々な観法を一つにまとめ、西山は禪師として『観経』の観念法を禪的に表現したと考えられる。その外、西山は阿弥陀仏の白毫と観世音菩薩及

大勢至菩薩を観する法として「三種浄観」と述べている。

以上、西山の観念念仏法は『観経』の日想観、像想観、仏身観、普観、雜想観などの観念法に基づいて、菩提達磨と『求生行門要出』の念仏法を継承した心口相應の念仏を主張している。

二 臨終来迎

『禪家龜鑑』に次のように述べている。

又曰世間稚兒 迫於水火 高声大叫則父母聞之 急走救援
如人臨命終時 高声念仏則仏具神通 決定来迎爾 是故大
聖慈悲勝於父母也 衆生生死 甚於水火也

この来迎の思想は二分別することができ、一つには高声念仏であり、この高声念仏の思想は永明延寿の『萬善同歸集』（大正四八卷九六二頁中）にある「高声念仏の十種功德」の中の第十生於浄土の思想を受け入れたと思われる。二つには「仏具神通 決定来迎爾」である。そこで浄土三部経における来迎の聖衆は真身仏、化身仏、比丘、諸眷属、化身菩薩、金蓮華などさまざまな姿を顕わすものであるが、西山休静が示された来迎仏は仏のみしか示されていないことから、『阿弥陀経』における来迎仏と同じであるといえよう。次は往生の時間について見ると、

西方念仏法 決定超生死 心口若相應 往生如彈指 一念踏

蓮華^一 誰過^二八千里^一 功成待^三命終^二大聖來迎爾^一（『心法要抄』）
と示され、この往生の時間について浄土三部経には、「即随^二彼仏^一」、「如^二彈指頃^一」、「如^二一念頃^一」、「如^二壯士屈^三伸臂^一頃^二」、「未^レ拳^レ頭頃^一」などと示されている。その中で西山休静は『観経』の上品上生の「如^二彈指頃^一」の説を引用するものである。

以上、西山の臨終来迎の思想は永明延寿の高声念仏と『阿弥陀経』の真身仏の来迎及『観経』の上品上生の彈指往生の思想を受け入れたといえる。

三 禅淨双修

まず、中国における禅淨双修の思想について、五祖弘忍の『最上乘論』に、

若有^レ初心学^二坐禅^一者 依^二觀無量寿經^一端坐正念 閉^レ目合^レ口
心前平視^二隨^二意近遠^一 作^二一日想^一守^二真心^一 念念莫^レ住（大正四
八卷三七八頁上）

と述べられ、坐禅する初心者に対して『観経』の日想觀を勧められているから、弘忍の禅淨双修の思想が窮われる。その後、禅淨双修の結実は永明延寿の『浄土指帰』の「参禅念仏四料揀」の中に説かれる「有^レ禅有^二浄土^一 猶如^二戴^レ角虎^一」である。西山は弘忍と永明延寿の禅淨双修の思想を受け入れ、『禅教訣』に、

西山休静の浄土思想と諸経、諸師の關係について（李）

阿弥陀仏在^二何方^一 着^二得心頭^一切莫^レ忘
念到念窮無念処 六門常放^二紫金光^一

と述べられている。つまり、弘忍と永明延寿とは異なる西山独自の公案念仏といえる。さらに、西山は『心法要抄』に、「心想^二金山^一 手回^二珠百八^一 反觀念者誰 非^レ心亦非^レ物」と述べられていることから、『観経』の觀法を公案的な觀法として取り扱う所が西山の特徴である。

西山は以上のような考えをもって『心法要抄』に次のように述べられている。

参禅即念仏 念仏即参禅 本性離^二方便^一 昭昭寂寂然

右文は禅淨一致の思想のみならず、参禅も念仏も本性によって見れば、皆方便だと禅的に表現している。さらに、西山は『清虚堂集』に、「念仏参禅法 功成理不^レ差 身心如^二放下^一 古木定生^二花^一」といって禅淨一致の思想を主張するものである。

以上、西山の浄土思想は浄土三部経の中で最も『観経』の觀念法に基づいて、菩提達磨と弘忍及び永明延寿の禅淨双修思想を継承しつつも西山独自の公案念仏に発展させたものといえる。換言すれば、参禅する人に対しては公案念仏を勧め、念仏する人に対しては觀念念仏を勧めたといえる。

（キーワード） 西山休静の浄土思想

（仏教大学大学院）